



# ¡MÉXICO MÁXICO!

メヒコ マヒコ - 魅惑の国メキシコ - may. 2018



【Vol.9】密林の庭ラス・ポサスとシティの美術館

霧の中から浮かび上がる建築



## 密林の中のシュルレアリスム

人生のダイナミズムが足りない! と思い、色々なものに区切りをつけてサン・ルイス・ポトシ州のヒリトゥラ(Xilitla)村を訪ねてきました。普段のシティ生活ではメキシコで暮らしている実感はもう薄らいでいますが、夜行バスの車窓から山肌一面に灯る家々の明かりを眺めると、改めてメキシコにいることを思い出します。

ヒリトゥラでは、のんびり羽をのばそう! と心に決めていました。ここは前回レポートで触れたプエブロ・マヒコ※1に選ばれた地域のひとつで、中心地から40分ほど歩いた山奥に、廃墟好き一押しの庭ラス・ポサス(Las Pozas)があります。

鬱蒼と生い茂る森の中には、英国詩人エドワード・ジェームズ(Edward James: 1907-1984)が当時のメキシコ・モダニズム建築の流れから距離を置いてひとり創造し続けたコンクリート建造物群の庭が広がります。近くの滝の音やセミの鳴き声を聴きながら、年月を経て苔むすコンクリートと熱帯植物の隙間を散策できるラビリンス。強度などの構造力学を取り去り、純粋にイマジネーションだけを投影した作品群からは、形態の可能性を追い続けたエドワードの姿がうかがえる気がします。

INBA(国立美術研究所)も保存活動に着手しているこのラス・ポサス。将来的にUNESCOの世界遺産に登録されるかも(?)しれない秘境スポットです!



植物のように生える支柱

街角に建つラス・ポサス風ホテル



## 渓谷の村ヒリトゥラ

バスチケットを買う際に発音が難しく通じなかったヒリトゥラ。7時間にも及ぶ激しく揺れる山道を走行後、明け方4時に「終点だよ～」と言われ暗闇の道路脇に降ろされ、携帯電話の電波が入らない場所と知った時は冷や汗でしたが、夜が明けてみれば、礼拝の刻を告げる修道院の鐘の音から朝が始まる穏やかな場所でした。

平日の訪問だったので観光客はほとんど見かけず、道端や街角で布を広げて野菜やコーヒーを売る地元の生活の様子が垣間見られます。すれ違う際に挨拶や"¡Qué le vaya bien(よい旅を)!"と声を掛けてくれる方も多く、旅行気分を盛り上げてくれます。

ヒリトゥラは標高約640mの谷間に位置する地域で、時折り霧が立ち込める風情はさながら日本の温泉街のよう。村のメインストリートは観光地化されていますが、道を1本入ると長い下り階段が続く見晴らしの良い景色に出会えます。

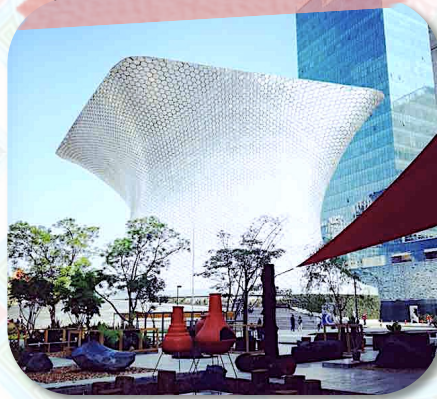
メキシコの地方は本当に長閑で、地元の方々もシティより一層穏やか。シティとはまったく違うメキシコに触れられ、でも同じ国なんだなぁと不思議になります。ホテルのご家族とカフェを1杯いただきながらそんなことを思った小旅行でした。シティ発着は最短でも3日必要ですが、のんびり過ごすには最高の場所です。



高台から眺めるヒリトゥラ中心地

※1 メキシコ政府が指定する保存プログラム「魔法のように魅力的な街(EI programa de Pueblos Mágicos)」のこと。

## ウロコの外観 ソウマヤ美術館



## 裏側から見るシティの美術館事情

FADの修復保存コースも、5モジュールのうち3つが終わり、やっとここまで…！と嬉しさを噛み締めています。先日、各モジュールの最終エッセイと終了テストを終え、ここ3ヶ月のてんやわんや具合を振り返りながら少し放心気味でもあります。

これまで、運営戦略、保護法規、保存修復について学んできましたが、課題で出される実験&読書レポート等に割く時間のほうが圧倒的に多く、眠気と相談する毎夜でした。そんな理論中心の講義が続くなか、楽しみだったのが美術館のバックヤード見学。ここで少しだけシティの美術館事情について触れてみたいと思います。

まず、日本で知られているシティの美術館代表格といえばソウマヤ美術館(Museo Soumaya)です。メキシコ国内では否定的な風潮が強いですが、西洋近代のコレクションが豊富で、ロダンを筆頭に有名作家の作品が鑑賞可能。展示企画にあたって他館からの作品借用はしないそうで、自館のコレクションだけで展示が構成できる潤沢さは大富豪の私設美術館ならではの。

ソウマヤの隣には、メキシコ大手飲料メーカーの財団が経営するフーメックス美術館(Museo Jumex)があります。コレクションを持たないためギャラリー的要素が強いですが、企業のメセナ活動の代表例です。大胆にも展示に動植物や土が取り入れられており、コンテンポラリー100%な美術館という印象です。



吹抜けの展示空間@Jumex 美術館



フリーダ美術館入口@ココアカン

## 個性派フリーダ・カーロ美術館

一方、フリーダ・カーロ美術館(Museo Frida Kahlo)のように、個人の邸宅がそのまま美術館になっている例もあります。展示用に設計された空間ではないため、作品にとっては厳しい環境ですが、アトリエや寝室、食堂、中庭も散策でき、作品だけでなくフリーダが暮らしていた当時の様子まで体感できる場所として不動の人気。この美術館に行かないと体験できないものがあるという点で、希少価値の高い美術館です。フリーダの本棚には、日本に生まれパリで活躍したレオナルド・フジタの画集なども収められており、おお…！とひとり静かに気持ちが上がりました。

上記3館のように、メキシコの私立美術館はコンセプトを明確に打ち出しているため個性派揃い。週末に美術館へ行くメキシコ人が多い理由のひとつだと感じます。

## 初めての正統派たこ焼きパーティ

1.5ヶ月で1セメスターが終わるCEPEは人の入れ替わりが激しいですが、そんな中でも昨年秋に一緒だった元クラスメイト達とは今でも繋がっています。先日は先生ご夫妻も招いて、たこ焼きホームパーティをしました。メキシコ・ウクライナ・ロシア・中国・日本の多国籍メンバーが集まり、スペイン語で近況を語る会です。時々、先生から文法間違いを指摘されながら、大いに喋って笑ったひと時でした。懐かしのマリオパーティーでも盛り上がり、先生のコントローラー捌きに脱帽。メキシコでもヨッシーはヨッシーと呼ぶそうです。最近は閉塞感を感じていた日々だったので、こういう時間も大切にしたいと思った一幕でした。



たこ焼きの回転にトライ&エラー